

れんぼうしきのぼりがま
連房式登窯

種 別	小松市指定文化財 建造物
指定年月日	昭和48年11月2日
所 在 地	八幡（小松市立登窯展示館）

連房式登窯とは、斜面を階段状に整形し複数の焼成室を設けた窯のことである。

この地区では、当初は若杉地区が窯業の中心であり、近世若杉村の十村・林八兵衛によって文化年間（1804～1818）に窯が開かれた。その後、加賀藩営の若杉陶器所となるが、天保7年（1836）に火災で焼失。隣の八幡地区に窯が移され、一大窯業生産地となった。本窯はその流れを汲むもので、明治期に若杉・八幡で築かれた近代九谷磁器窯の典型的な形式を伝えるものである。

本窯は長さ10.9メートル、幅2.9メートルの煉瓦積みの窯で、主軸を東西方向にとり、 16.42° の緩やかな傾斜を持つ。焚口は東側にあり、連続した5房の焼成室と煙道を持っている。焼成室は、幅2.2メートル、奥行1.47メートル、高さ2.1メートルで、アーチ状の天井をもつ。また焼成室の側面には製品出し入れ口が開けられる。

昭和40年頃まで月に一回程度焼成が行なわれ、ここでは九谷焼の素地⁽¹⁾や置物等を焼いていた。

同様の窯は昭和10年代まで広く使われていたが、現在では本窯が石川県内で唯一の遺存例である。近代九谷焼生産の歴史を伝える不可欠の遺構であり、後世に伝えるべき価値を有するものである。

(1) 素地：九谷焼では、白磁釉のみを掛けて本焼きした器で、上絵付けに供される。

白素地ともいう。

